川越町の子どもたちの学力向上に向けて

～全国学力・学習状況調査の結果報告～

令和６年１０月
川越町教育委員会

本年４月、小学校６年生及び中学校３年生を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」の結果概要をお伝えします。川越町教育委員会では、結果からわかる、子どもたちの「強み」「弱み」等の傾向をとらえ、具体的な施策に反映していきます。つきましては、保護者の皆様には、家庭生活や生活習慣の見直しに向けてご協力をお願いいたします。

なお、この調査は学力の特定の一部分を測るものであり、学力のすべてを測るものではないことをご理解ください。

1. 学力･学習状況調査結果

（１）川越町小学校

□全体の傾向

国　語

正答率は、全国比（全国平均正答率）を 4.2 ポイント下回っているが、正答数の中央値（※１）は全国の値とほぼ同程度となっている。

評価の観点（※２）別に見ると、「知識・技能」の項目は 0.6 ポイント、「思考・判断・表現」の項目は 7.1 ポイント、全国比を下回っている。

学習指導要領の内容（※３）別に見ると、知識・技能では「言葉の特徴や使い方に関する事項」が 1.4 ポイント全国を上回っているが、「情報の扱い方に関する事項」では 6.8 ポイント、「我が国の言語文化に関する事項」では 2.6 ポイント全国を下回った。また、思考力・判断力・表現力では「話すこと」で 7.5 ポイント、「書くこと」で 10.3 ポイント、「読むこと」で 4.6 ポイント全国平均を下回り、弱さが見られる。

算　数

正答率は、全国比を 1.4 ポイント下回っているが、正答数の中央値（※１）は全国の値とほぼ同程度となっている。

評価の観点別に見ると、「知識・技能」は 0.8 ポイント、「思考・判断・表現」は 2.0 ポイント全国を下回っている。

学習指導要領の内容別に見ると、「変化と関係」の領域で 2.8 ポイント、「データの活用」の領域で 3.2 ポイント全国比を下回っており、弱さが見られる。

※１　中央値
　小さい数値（あるいは大きい数値）から順に並べたときに真ん中に来る数値

※２　評価の観点
　学習指導要領において、児童生徒が学校教育の中で身につけるべき力「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」に対応した形で評価する際の３つの観点
　○「知識・技能」・・・各教科で身につけるべきとされている知識やスキル
　○「思考力・判断力・表現力」・・・課題や問題に向き合って解決していく力や友だち

と協働しながら問題解決の糸口を見つけていく力、自らの思いを表現していく力
○「主体的に学習に取り組む態度」・・・児童生徒自身がいかに学習を調整して、知識を習得するために試行錯誤しているか

※３　学習指導要領の内容
学習指導要領において、各教科に求められる内容。例えば小学校国語科であれば「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」など、小学校算数科であれば「数と計算」「図形」「変化と関係」などに分かれている。

□設問別結果から見える各教科における主な「強み」と「弱み」

	強みと弱み　（強み・・・「◎」　弱み・・・「◇」）
国語	**◎文の中における主語と述語との関係を捉える。（＋7.4）** ◇資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができる。（－15.0） ◇目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。（－14.6） ◇人物像を具体的に想像することができる。（－7.1） ◇情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる。（－6.8） ◇目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができる。（－6.7）
算数	**◎角柱の底面や側面に着目し、五角柱の面の数とその理由を言葉と数を用いて記述できる。（＋5.9）** ◇簡単な二次元の表を読み取り、必要なデータを取り出して、落ちや重なりがないように分類整理することができる。（－7.7） ◇球の直径の長さと立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことができる。（－7.1） ◇道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる。（－3.8） ◇速さが一定であることを基に、道のりと時間の関係について考察できる。（－3.6）

（２）川越町中学校

□全体の傾向

国　語

全国比（全国平均正答率）を 2.1 ポイント下回ってはいるものの、正答数の中央値は全国と同等となっている。

評価の観点別に見ると、「知識・技能」の項目は 2.1 ポイント、「思考・判断・表現」の項目は 2.8 ポイント、全国比を下回っている。

学習指導要領の内容別に見ると、すべての項目で全国を下回ったが、中でも「話すこと・聞くこと」においては 4.2 ポイント、「書くこと」の項目においては 4.8 ポイント全国を下回っており、弱さを感じるところである。

数　学

全国比を 1.5 ポイント下回ってはいるものの、正答数の中央値は同等である。

評価の観点別に見ると、「知識・技能」の項目は 1.7 ポイント、「思考・判断・表現」の項目は 2.3 ポイント、全国比を下回っている。

学習指導要領の内容別に見ると、「データの活用」の領域と「数と式」の領域で全国平均と同等であるが、「図形」の領域で 4.6 ポイント、「関数」の領域で 3.8 ポイント下回っており、弱さを感じるところである。

□設問別結果から見える各教科における主な「強み」と「弱み」

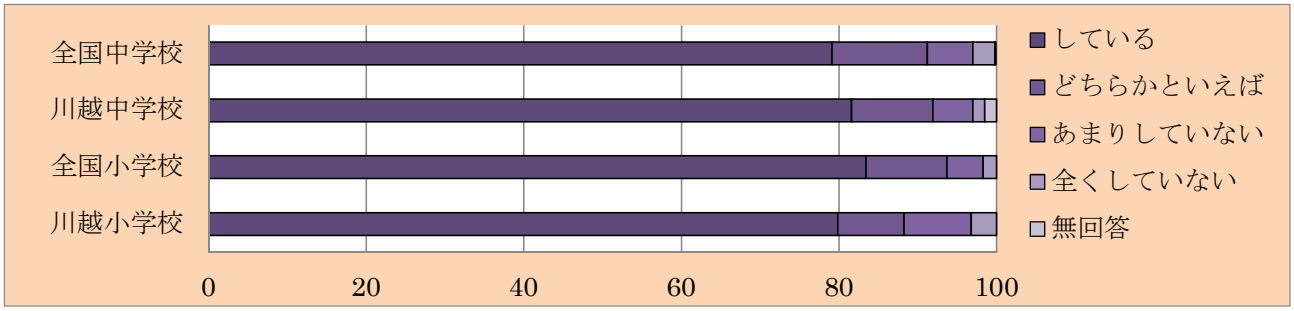
	強みと弱み　（強み・・・「◎」　弱み・・・「◇」）
国語	◎文章の全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係を捉えることができるかどうかをみる。（＋2.2） ◇必要に応じて質問しながら話の内容を捉えることができる。（－6.7） ◇意見と根拠など情報と情報との関係について理解している。（－5.6） ◇目的や意図に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。（－6.0）
数学	◎連続する二つの偶数を、文字を用いた式で表すことができる。（＋2.2） ◎等式を目的に応じて変形することができる。（＋2.6） ◎与えられたデータから最頻値を求めることができる。（＋3.2） ◇二つのグラフにおける y 軸との交点について、事象に即して解釈することができるかどうかをみる。（－8.8） ◇回転移動について理解している。（－7.4）

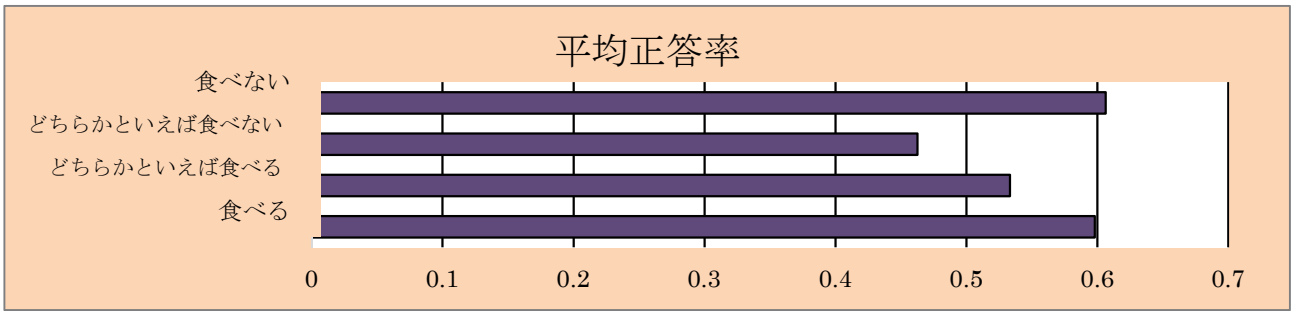
	◇事象を角の大きさに着目して観察し、問題解決の過程や結果を振り返り、新たな性質を見いだすことができる。（－5.7） ◇複数の集団のデータの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる。（－4.9） ◇事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができる。（－4.8）

（３） 児童生徒質問紙による生活調査結果

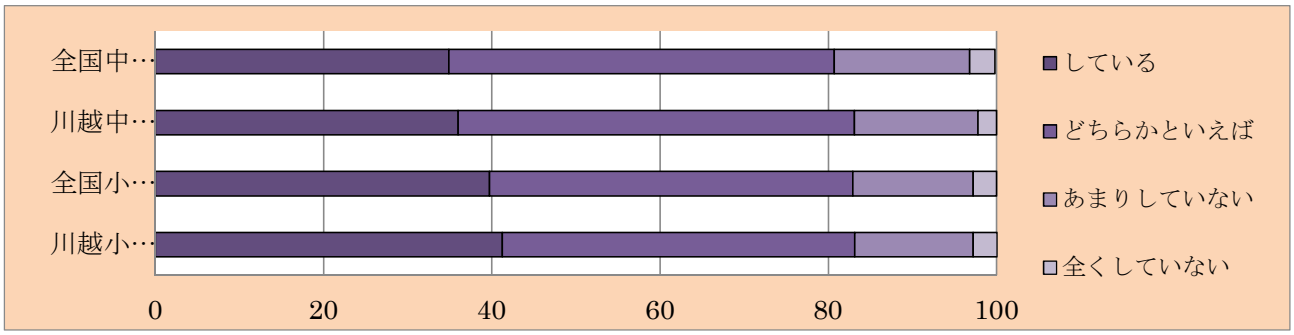
① 基本的生活習慣

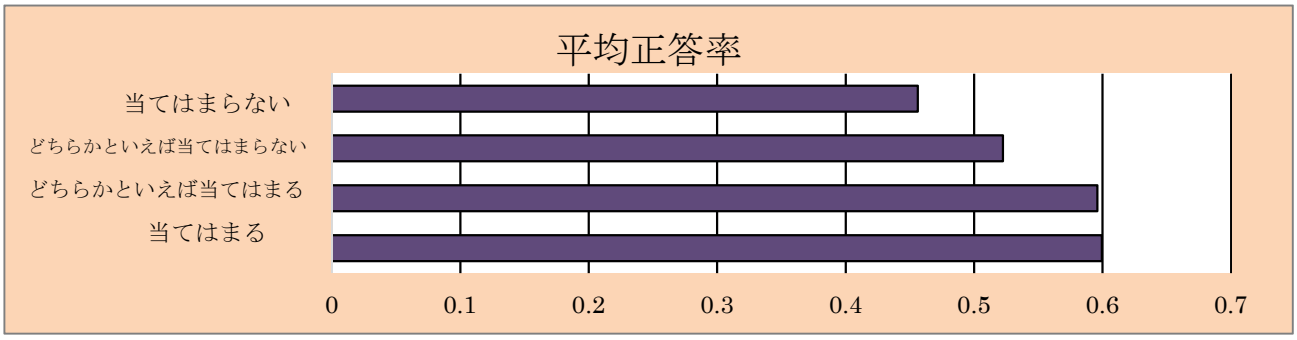
Ｑ：朝食を毎日食べていますか。



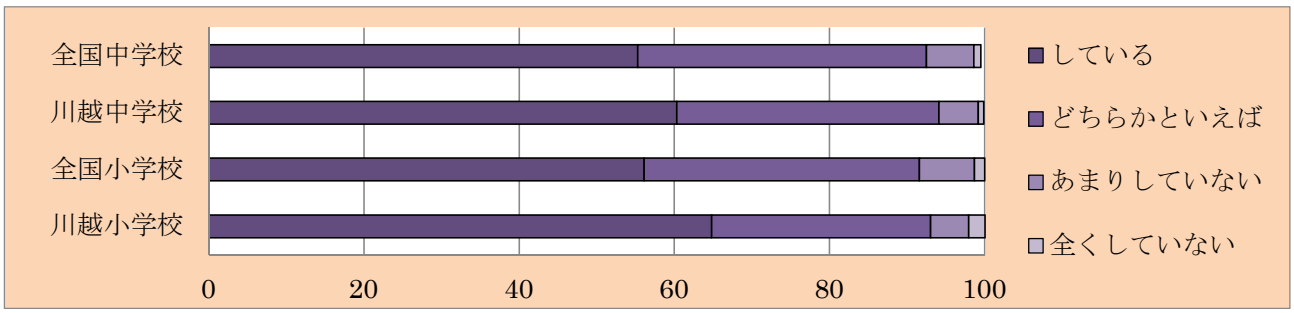


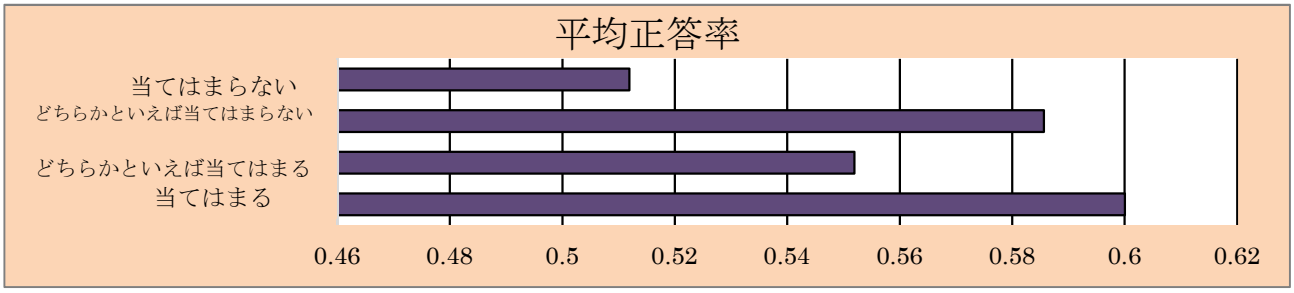
Ｑ：毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか。





Q：毎日、同じくらいの時刻に起きていますか。





＊　就寝時刻と起床時刻は中学校、小学校とも「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した割合は全国と同程度かややよい結果となっている。

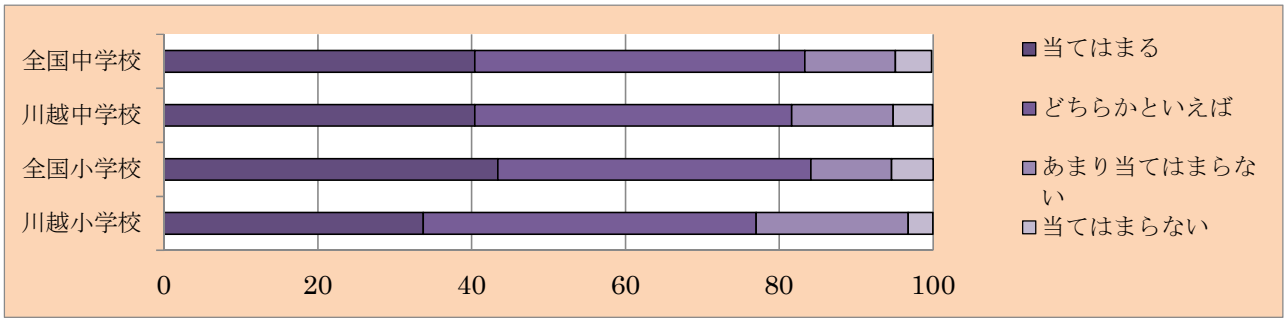
朝食の喫食率は、中学校では全国と同程度であるが、小学校では全国よりも 5.5 ポイント低く、「食べない」と回答している児童も 3.2%おり、全国のおよそ２倍となっている。

朝食の喫食や起床時刻・就寝時刻と正答率のクロス集計を見ると、規則正しい生活をしている児童生徒の正答率が最も良く、「どちらかといえば当てはまる」「どちらかというと当てはまらない」「当てはまらない」と下がっていく傾向が見られる。朝食の喫食と正答率のグラフでは「当てはまらない（食べない）」の正答率が 60.6%となっているが、小中学校で調査を受けた 244 名中、７名しかいなかったため、データとしての信頼性は高いとは言えない。

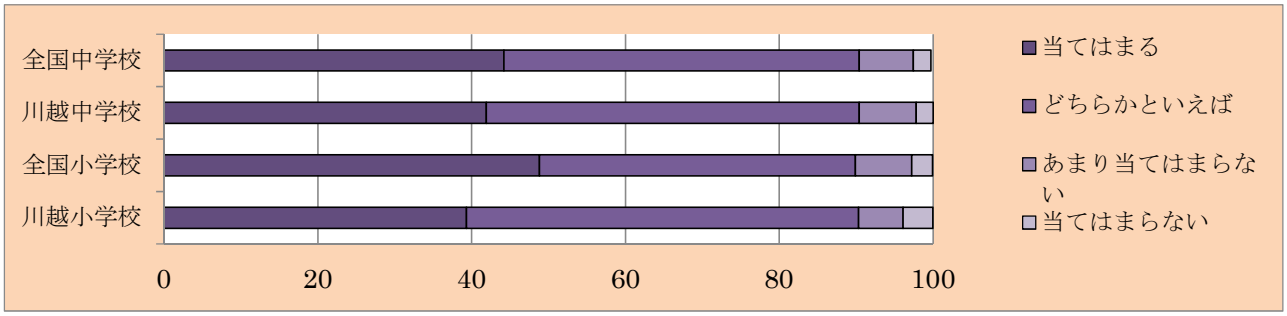
「早寝・早起き・朝ごはん」を心がけ、規則正しい生活リズムを整えることが大切である。

② 自己肯定感

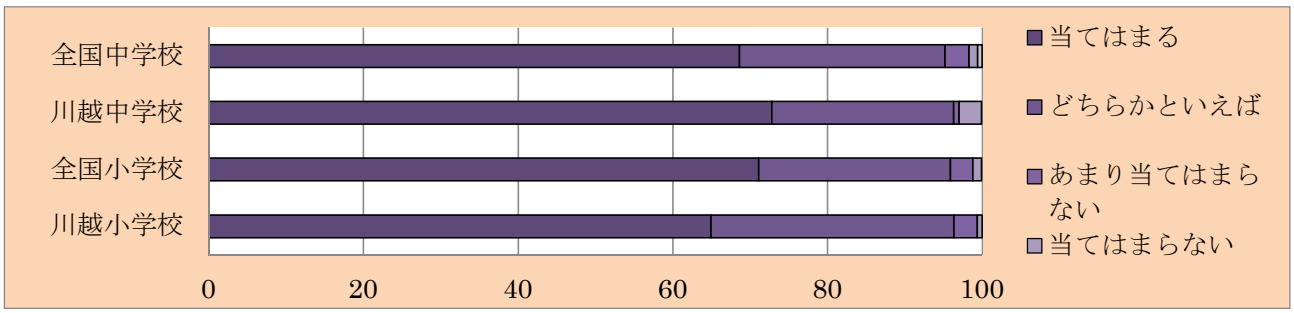
Q：自分には、よいところがあると思いますか。



Q：先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。



Q：人の役に立つ人間になりたいと思いますか。



＊　「自分には、よいところがあると思うか」の質問に対し、肯定的な回答は中学校では全国よりも 1.7 ポイント、小学校では 7.1 ポイント下回り、「当てはまる」と回答した割合では、中学校では全国と同程度だったが小学校では 9.7 ポイント下回っている。

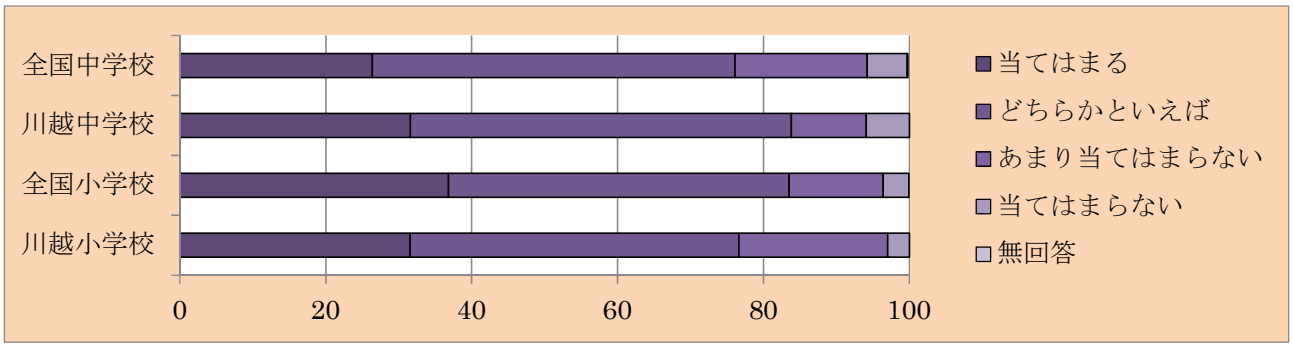
「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思うか」の質問での肯定的な回答は、小中学校のどちらとも全国の割合と同程度であった。小中学校ともに９割近くの児童生徒が「先生は自分のよいところを認めてくれている」と感じており、非常に高い結果となっている。教師の配慮等を感じることができる。ただ、約１割の児童生徒は認められていないと感じていることから、教師の声かけが届いていない、もしくは児童生徒が認めてほしいところと教師が認めているところとが一致していないことが考えられる。

「人の役に立つ人間になりたいと思うか」の質問に対しては、小中学校のどちらも全国の値をわずかに上回っている。「人の役に立ちたい」という思いはそんな自分になりたいという思いでもあり、その思いと現在の自分とを比較して否定的な思いにつながっているのかもしれない。

本町では「豊かな心」を培うため、非認知能力を高めることや自己肯定感・自己有用感を育み、相手の個性を尊重することを大切にしているところである。今後はこの結果を踏まえ「豊かな心」を培うための自己肯定感・自己有用感を育むことができるよう、より一層、町の教育基本方針の共通認識を図っていく。

③　地域や社会に関わる活動の状況

Q：地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか。

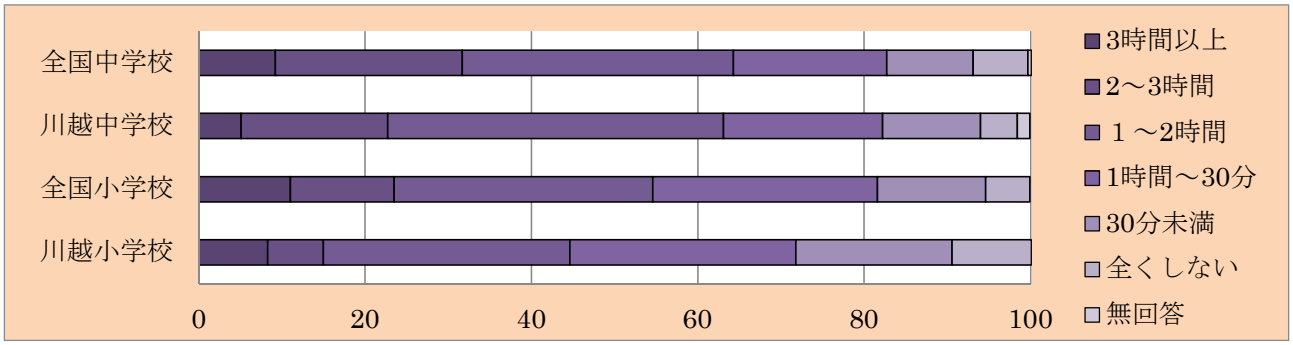


＊　中学校では肯定的な回答が全国を 7.7 ポイント上回ったが、小学校においては肯定的な回答が全国を 6.9 ポイント下回っている。

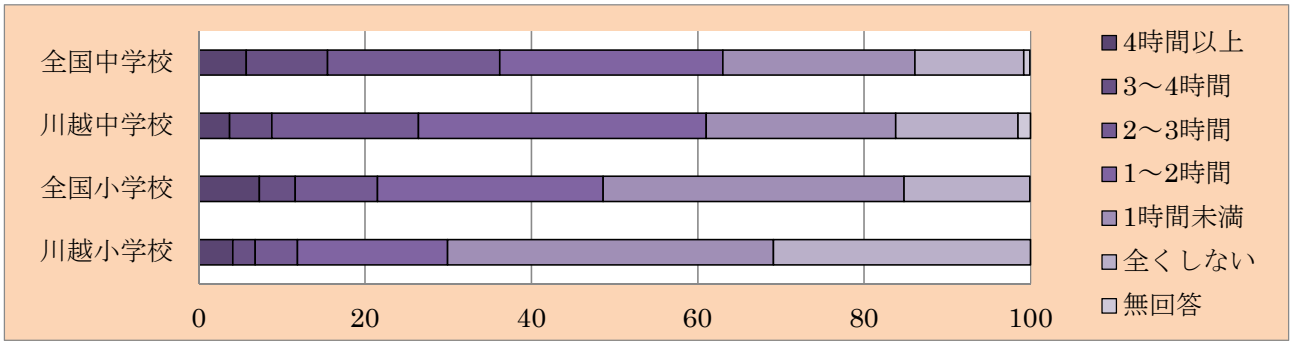
小学校段階では、まだ自分と地域や社会との関係を意識することができていないことが考えられる。現在も地域の方々と連携した教育活動を取り入れているが、児童生徒がより、自身と地域や社会とのつながりを大切に感じられるような活動や体制を整えていく必要がある。

④ 学習習慣

Q：学校の授業時間以外に、普段（月～金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾や家庭教師、インターネットで学ぶ学習も含む）

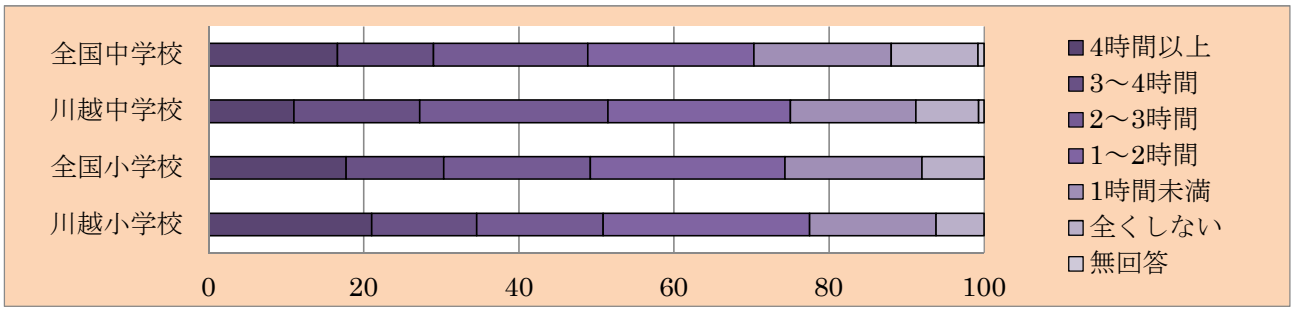


Q：土曜日や日曜日など学校が休みの日に、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾や家庭教師、インターネットで学ぶ学習も含む）

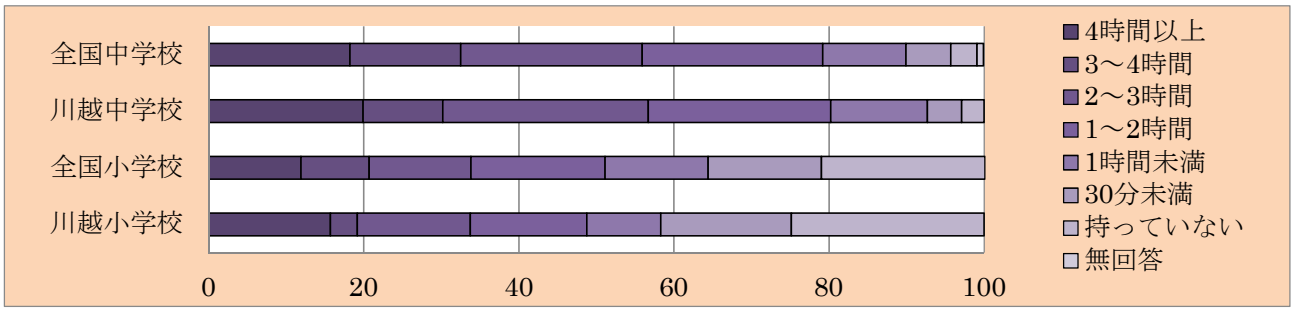


⑤電子機器の使用時間

Q：普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をしますか



Q：普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンで SNS や動画視聴などをしますか（携帯電話やスマートフォンを使って学習する時間やゲームをする時間は除く）



＊　平日の学習時間で１時間以上学習していると回答した割合は、中学校においては全国と同程度であるが、小学校においては 10 ポイント下回っている。

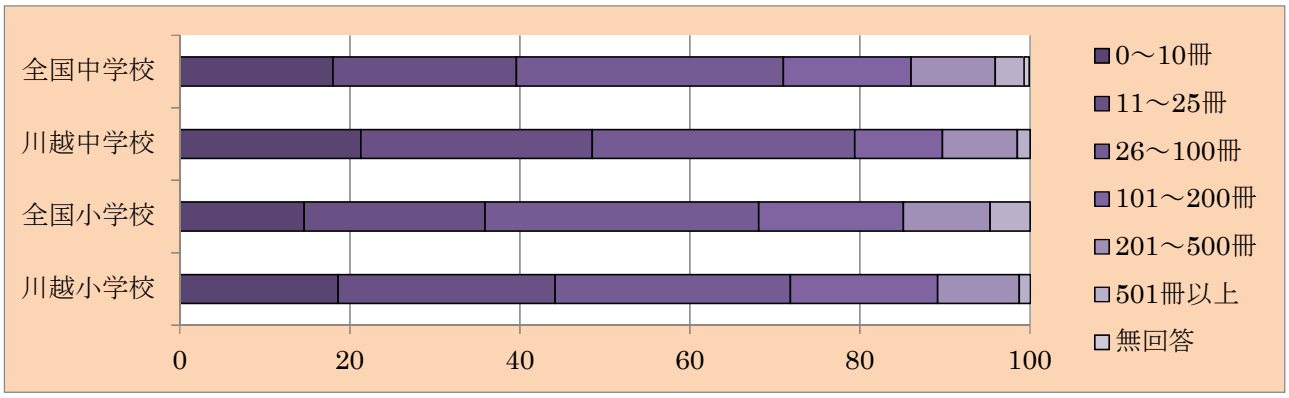
一方で平日に２時間以上ゲームをしている割合は小中学校ともに若干上回っている。また、平日に携帯電話やスマートフォンで SNS や動画視聴を４時間以上行っている（ゲームの時間を除く）と回答した割合は、中学校で 19.9%、小学校では 15.7%に上っている。

平日に帰宅してから多くの時間をゲームや SNS、動画視聴に費やしていることで、学習時間を十分確保することが難しくなっていることが要因であると考えられる。

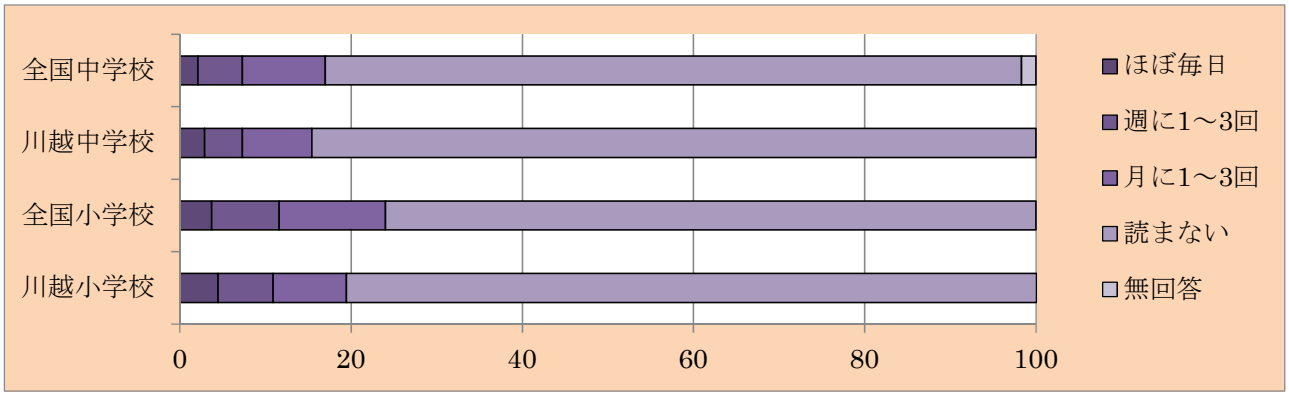
学校が休みの日の学習時間では、小中学校ともに１時間以上家で勉強している児童生徒の割合は、全国よりも低い結果となった。特に小学校では、全国よりも 18.7 ポイント下回る結果となった。休日は家族との時間を大切にしていたり、地域の行事等に参加していたりすることも影響しているのではないかと考えられる。

⑤　読書習慣

Ｑ：あなたの家にはおよそどれくらいの本がありますか。



Ｑ：新聞を読んでいますか。

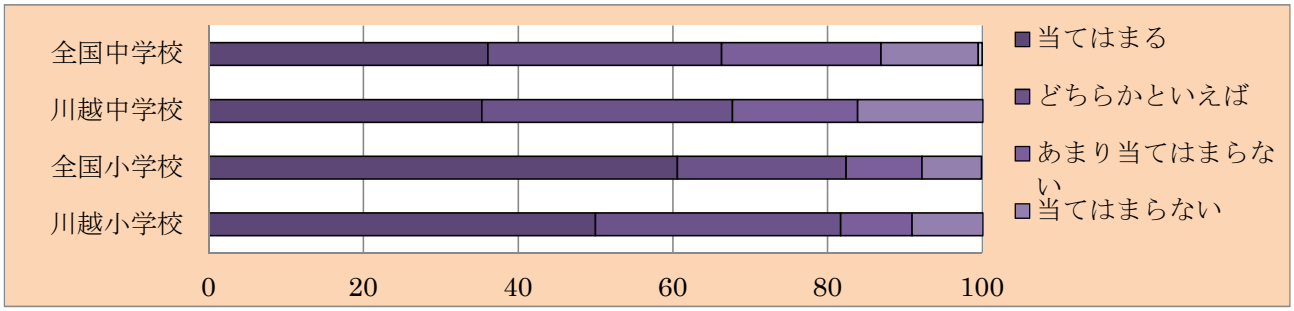


＊　100 冊以上家に本がある割合は小学校で 3.7 ポイント、中学校では 7.7 ポイント全国を下回っており、25 冊以下と回答した割合は小学校で 8.3 ポイント、中学校で 8.9 ポイント上回っている。全国と比較し、川越の小中学生の家庭にある本の冊数は少ない傾向があることが分かる。また、新聞を読んでいないと回答した割合は小中学校ともに全国を上回っている。新聞については紙の新聞を購読しなくなった家庭が増加していることも要因であると考えられる。

授業以外の場面で児童生徒の読書活動推進に向けて、学校図書館の効果的な利用法や家庭読書推進の啓発に向けての取組を検討していかなければならない。

⑥ キャリアの形成

Ｑ：将来の夢や目標を持っていますか。



＊ 「将来の夢や目標を持っているか」の質問に対し、肯定的な回答をした児童生徒の割合は、小中学校ともに全国と同程度である。しかし、「当てはまる」に限定して見てみると、小学校では全国より 10.6 ポイント下回っている。

コロナ禍において児童生徒に将来の目標や夢を持たせられるような取組が中止になっていたことが影響していると考えられる。それらの取組も実施できるようになってきているが、今回の結果の共通理解を図り、さらにキャリア教育を推進していく必要がある。

（４）学校質問紙の結果からみえる児童生徒の姿

① 言語活動の充実と自分の考えを深め、表現する力を育成する取り組み

新たな学習指導要領に沿った教育活動が行われるようになり、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めることや児童生徒の発達の段階を考慮して、児童生徒の言語活動など学習の基盤をつくる活動を充実することが求められている。言語活動については「言語活動について、国語科を要としつつ、各教科の特質に応じて学校全体として取り組んでいますか」の問いに対して、すべての学校が肯定的な回答をしている。このことから、川越町内のすべての学校において、児童生徒の学習の基盤をつくる活動として国語科のみではなく、あらゆる教科等で言語活動に取り組んでいることが分かる。「話し合いなどの活動で、自分の考えを相手にしっかりと伝えることができていると思いますか」という問いに対して、すべての学校が肯定的な回答をしている。このことから、各校で教師が学習指導要領に示された児童生徒につけるべき力を意識したうえで、言語活動を取り入れた主体的な学びを実現するための授業構成を考え、実践していることが分かる。

一方で小学校児童質問紙の「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」という問いに対して肯定的な回答をした児童は昨年度 86.1%から 76.2%とおよそ 10 ポイント下げることになり、小学校においては児童と教師の感じ方に乖離があることが伺える。中学校では昨年度 81.9%から 83.1%と昨年度を上回っており、生徒自身も話し合い活動を行うことが、自分の学びにつながっていることを実感していると考えられる。今後も児童生徒が基礎的・基本的な知識及び技能を主体的に習得し、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むために各教科等の中でねらいをもった話し合い活動等を進めていく必要があると考える。

② 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と ICT 機器の効果的活用

「授業では、課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか」という問いに対して、すべての学校が肯定的な回答をしている。学校は学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業実践を行っていることが伺

える。児童生徒質問紙にある「これまでに受けた授業では課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という問いに対して、川越町の子どもたちは肯定的な回答が全国を上回る結果となっている。子どもたちにとって授業の中で、「何を学ぶか」が明確になっており、授業のふりかえりをとおして、次の学習の意欲につなげられているのだと考えられる。今後も川越町が大切にしている「めあてとふりかえりのある授業」を実践し、児童生徒に「何を学ぶのか」という学習の目的意識をはっきり持たせたうえで、授業に臨ませ、「どのように学ぶのか」を意識させた授業改善をより一層進めていくことが重要である。

また、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、一人一台タブレット端末は一つのツールとなっている。「児童生徒一人ひとりに配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度活用しましたか」の問いに対しては、中学校では「毎日」、小学校では「ほぼ毎日」と回答している。しかし、児童生徒質問紙にある「昨年度までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」の問いに対する週３回以上の回答は、小学校では57.3%で全国よりも2.2ポイント低く、中学校では38.3%と全国より26.1ポイント低くなっており、児童生徒と教師との間隔に乖離がある。児童生徒が目的意識をもってICT機器を活用することができるように教職員へのＩＣＴ活用に関する研修会を行い、どのような場面で、どのように活用することがより効果的な活用になのか等研修を深めていく必要がある。

③ 自己肯定感・自己有用感の育成（自尊感情）

学校質問紙において自己肯定感を育む視点の質問はなくなったが、児童生徒質問紙において「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という問いに対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した肯定的回答率は、小中学校のどちらとも若干ではあるが全国よりも高くなっている。教師が学校教育活動の様々な場面で児童生徒の姿を見取り、「認め」「褒め」「励ます」といったことを意識的に行っていることが伺え、児童生徒の個性を大切にしながら、豊かな心の育成に取り組んでいることが分かる。そして、児童生徒も教師が自分たちのことを見てくれているという思いを持てていることが分かる。

一方で、同質問に対し「当てはまる」と回答した割合は、中学校で2.3ポイント、小学校では9.5ポイント下回っている。また「自分には、よいところがあると思いますか」の問いに対しての肯定的回答率は小学生で77.0%、中学生で81.6%となっており、全国と比べ小学校で7.1ポイント、中学校で1.7ポイント下回っている。児童生徒は「先生たちは自分のことをよく見てくれて、認めてくれているけど、自分自身には自信が持てない」と感じているのではないかと考えられる。また、前述したように教師は個々を認める声掛けを行ってはいるが、児童生徒の認めてほしいところと一致していない可能性も考えられる。

学校教育活動において自尊感情の育成には、個々の児童生徒が学習の場面において「できた」「わかった」という満足感や充実感を持つことや、学校生活での仲間とのかかわりの中で認められること、受け入れられること等が重要な要素になると考える。しかし、学校教育活動の中だけでは自己肯定感・自己有用感の育成は行えず、家庭や地域とともに育成していくことが重要である。一人ひとりのよい点や可能性を見つけ、よいタイミングで評価や承認を行うことが自己肯定感・自己有用感の育成につながる。今後も家庭・地域・学校が一体となって児童生徒を見守りながら、成長の後押しをしていきたいと考えている。

2. 学力・学習状況調査結果の「弱み」を改善するための対策

全体を通して

全教科において、教科特有の**「見方・考え方」、つけたい力を明確に**し、「何を学ぶか」という必要な指導内容だけでなく、「何ができるようになるか」を重視し、そのために「どのように学ぶか」という学習過程を大切にした**授業改善**を進める。

1. 「めあての提示と振り返る活動」(目標の提示、振り返り活動)のある授業の徹底を図り、子どもたちが一時間の授業の見通しを持ち、授業の中で「できた・わかった」と実感が持てる学習へつなげる。
2. 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を行う。
3. ICT 機器の効果的な活用を探り、授業改善を行う。
4. 自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く力をつけるための指導を行う。
5. 一人ひとりの学習状況を十分とらえ、少人数による効果的な指導を行う。

国　　語

1. 基礎的な力をつける時間の確保

・漢字の定着のために、ていねいに指導できる時間の確保と家庭学習の充実を図り、定着に向けた取り組みを進める。

2. 書くことの指導の充実

・書く活動において、児童生徒の興味関心に応じた題材を設定し、子どもたち自らが書こうとする気持ちを高める手立てを講じ、児童生徒が主体的に取り組めるように工夫する。

・発達段階に応じて「字数制限やテーマなどの条件を与えて書く活動」を、授業の中に継続的に取り入れていく。(国語に限らず他教科においても「条件を与えて書く」活動を行っていく)

・自分の考えを文章として書く際には、自分の考えの根拠となることを明らかにしながら書く活動を取り入れていく。

3. 読む力を育成する指導の充実

・説明文においては、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけられるような指導を行えるようにしていく。

・いろいろな文章や作品に出会わせるために、読み聞かせの機会を充実したり、選書コーナーを設置したりするなど、各校において読書活動や学校図書館での活動を工夫する。

4. 自分の考えをまとめる活動の充実

・授業における話し合いや毎時間のめあてに対するふりかえりの中で、自分の考えをまとめる活動を取り入れる。発達段階や内容に応じて、字数制限やキーワードを提示するなどの条件を与えて書かせるようにする。

・自分の考えをまとめたものを友だちと共有する活動を取り入れ、自分の考えと比較し、新たな考えを知りながら、考えを深めていく活動を取り入れる。その手立てとして ICT 機器の効果的な活用を進めていく。

・自らの問題解決に必要な資料や情報を選択・活用し、友だちと互いに意見を出し合って自分なりの考えをまとめる活動を取り入れる。さらに、まとめたものを発表する活動につなげていく。

・小学校では「話すこと」に課題が見られるため、スピーチや自分の考えを伝える活動、整理して書いた文章を友達の前で読む活動等を積極的に取り入れることで「話す力」の向上と「自信を持たせること」につなげていく。

算　数・数　学

1. 基礎的な力をつける時間の確保
   - 基礎となる内容の定着のために、ていねいに指導できる時間の確保と家庭学習の充実を図り、定着に向けた取り組みを進める。
2. わかる授業を目指した授業展開の工夫
   - 子どもたちの生活に沿った身近な課題を見出し、児童生徒が主体的に取り組める授業を展開していく。また、算数・数学の時間に学習したことを日常生活の中で活用できるように工夫する。
   - 既習事項をもとにした応用問題等に取り組ませ、子どもたちが学び合う中で、その解決方法を見い出せるような学習活動を取り入れる。
   - 言葉や数・式と、図・表・グラフなどを関連付けて考える授業を取り入れる。
   - 「ふりかえり」の時間を大切にするとともに、子どもたちの理解度を測る評価問題などを適切に取り入れる。
   - 個々の子どもたちの強み・弱みを把握し、少人数による学習活動を進める。
3. 自分の考え方や求め方を説明する
   - 算数・数学用語、数学的な表現を用いて「◎◎であるから、△△である。」の形式で記述させたり発表させたりする。
   - ICT 機器を効果的に活用し、個々の児童生徒の考え方や求め方を交流したり、自分の考え方をまとめたりする。

3. 川越中学校の取り組み

（１）関わりの中で、「聴き合い学び合う」授業　「学びをあきらめない」授業。そして、自尊感情の育成・自己肯定感の育成に向けて、心の教育（キャリア教育を兼ねる）の充実を図る。

本校で大切にしている人権学習の基盤に立ち、「仲間づくり」を柱とした様々な「学びの場」において、教師の意図した学び合う機会を大切にした取り組みを進めています。授業における学び合う機会を効果的に仕組むことにより、日々の授業改善を図っています。「学び合う授業」を通して、お互いを支え高め合う仲間づくりを大切にした授業づくりを行い、「聴くこと」の育成につなげます。また、生徒たちの関わり合いの中から一人でも多く「わかった」「できた」と思える授業づくりを行います。聴く力・コミュニケーション能力の育成を期し，生徒個々の資質を高めます。

そのような授業づくりから、一人一人が大切にされ、「学びをあきらめない」「誰も一人にしない」授業づくりへとつなげていきます。また、本校では「自尊感情の育成」「自己肯定感の育成」も重要な課題である。そのために、１年間を通した様々な講演会をはじめとして、体験学習等を通した『心の教育』『出会い学習』を大切にしている。キャリア教育を兼ねて講演会形式で実施している。いのちの大切さを考える講演会として「ＬＧＢＴ性の多様性について深く学ぶこと」や、自分のからだ、自分の命、自分のことを大切にする「性教育」に取り組むことに重点を置く。また、キャリア教育の視点から、「学びをあきらめないこと、夢や目標を持つことの大切さと合わせて、夢や目標は変わってもいい」という視点での講演会等を計画的に実施し、子どもたちの「心の成長」を促す取り組みを継続しています。

（２）「書く」「綴る」「つなぐ」「かかわる」「語る」取り組み

本校で大切にしている取り組みとして、日常生活や授業の内容について自分の思いを書く活動を通して、自分を見つめ直したり、自分の気持ちを整理したりする取り組みを行います。特に大事にしているのが、自分の思いを書くことによって、学級通信、学年通信等でその言葉を綴り、つなぐ。そして、語る。その取り組みを通して、生徒間の相互理解を深め、生徒同士がかかわり、

つながることで自己肯定感を高めるとともに、「誰もが安心して自分の思いを表現できる居場所のある学級・学年・学校」をつくります。そして、「誰もが安心して学び合いができる学習環境」をつくります。

（３）ＩＣＴ機器の効果的な活用　「学びをとめない（学びの保障）」ためのＩＣＴ機器の活用

本校では、「わかる・できた」と思える授業づくりにつなげるために、ＩＣＴ機器活用の「日常化」を目指しています。一人一台のタブレット端末やプロジェクター等のＩＣＴ機器を効果的に活用し、視覚的に理解したり，学び合いの中から思考が深まったりする活動を行います。また、ＩＣＴ機器を利用して「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた効果的利用の推進を図っていきます。様々な理由で学校への登校が難しくなっている生徒に対しても、保護者・本人とも相談のうえ、「一人一人の学びを止めない（学びの保障）」ため、ＩＣＴ機器を活用した「オンライン授業」を可能な範囲で必要に応じて実施していきます。

（４）学習の理解と定着の要として、１時間の授業の中で「つけさせたい力」を明確にし、「めあて」と「振り返り」を大切にした授業つくり一貫性のある授業づくり。そして、授業には必ず協働的な学びの中に、「学び合う・教え合う授業づくり」を大切にしいきます。

学習の見通しを立てたり、学習したことを授業内で振り返ったりする活動を計画的に取り入れるため、一時間の授業の中で「つけさせたい力」を明確にし、「めあて」を大切にすることで、学びの質を高め、「振り返り（振り返り活動）」まで一貫性のあるつながりを大切にし、一時間の授業の中で「わかる・できたと思える授業」の実感が持てる学習へつなげます。授業には必ず協働的な学びの中に、「学び合う・教え合う授業づくり」として、班学習やペア学習を大事にしています。班学習が意見を「発表」するだけの場にならないように、「対話」を重ねて問題解決ができるような課題設定を各教科で取り入れ、互いの意見を聴き合える学びの環境を作っていきます。

（５）２年生数学授業における「習熟度別（コース別）」少人数授業を大切にすすめます。

本校２年生の数学授業では継続して「習熟度別(コース別)」少人数授業をすすめています。できる限り学年の生徒一人一人の学力の実態を明確にし、生徒一人一人の現状の理解度に応じたきめ細かな指導ができる体制を整えるため、生徒からの希望を重視した「習熟度別（コース別）少人数授業」を大切にしています。次の２つのコースを設置し、生徒自身にあったコースを考え、教師や保護者の助言も得ながらコース選択をします。（今年度は１年生でも９月からスタート）

■「基礎コース」・・・前年度の学習の復習を含め、基礎的な学習を繰り返し行うことを中心とした「学び合い・教え合い」を大切にする授業を行います。

■「標準コース」・・・基礎的な学習だけではなく、知識・技能を活用した「応用問題(課題)」などの発展的な学習に取り組むことに重点を置いた授業を行います。

（６）教師力の向上（生徒に関わる力・確かな授業力・日常的な授業改善）に向けた校内研修の充実

本校の学校教育ビジョンにおいて、一人一人の子どもたちを大切にした５つの具体的な柱のうち、「わかる・できたと思える授業」づくりを大切にしています。教師力の向上を目指し、日々授業改善の意識を持ち、教育活動に取り組んでいます。校内研修では、「仲間づくりを土台とした授業づくり」～協働的な学びを通して、質の高い「めあて」と「振り返り」をめざして～ という研修主題を設定して、教職員研修を通して学びを深めています。校内研修では武庫川女子大学の森脇教授を教育アドバイザーとして助言・指導をいただく。また、「川越エキスパート」として、三重県教育委員会北勢教育事務所指導主事、川越町教育委員会指導主事等の指導・協力をいただき、全員が１回以上の研究授業・公開授業を行いながら、授業を参観し合い自らの授業に活かす取り組みの大きな柱として位置付けて「確かな授業力・教師力の向上」に努めています。

4. 町教育委員会による手立て

（１）少人数教育の充実

少人数での指導体制を継続し、国語科および算数・数学科を中心とした基礎的基本的な力の向上を目指します。

（２）きめ細やかな指導体制の充実

町非常勤講師や学習支援員及びＡＬＴの配置を生かした指導のあり方をさらに充実し、一人ひとりの子どもたちが学びやすい環境づくりを進めます。

（３）学力向上推進担当者会の開催

川越町学力向上推進担当者会において、各校の学力向上に向けた取組やその成果・課題等について協議・情報交流を行い、子どもたちの学ぶ力を伸ばすための授業改善を進めます。また、川越町全体で進める学力向上策について検討します。

（４）校内研修等への訪問指導・支援

北勢教育支援事務所および町教育委員会の指導主事、学力向上アドバイザーが各校へ訪問し、学力向上に向けた校内研修への指導・支援を進めます。また、学力の定着を図るための授業のあり方について、教職員に向けた継続的な直接指導を進めます。

（５）ICT 機器を効果的に活用した授業の推進

ICT 機器を活用して、教師と児童生徒、児童生徒同士が意見や考え方を交流しあう場面を作り上げ、主体的・対話的な授業の実現を目指します。また、ICT 機器の研修会等の校内研修への指導・支援を進めます。

（６）家庭学習習慣及び読書活動の推進

各家庭でのスマートフォンや TV の視聴、ゲームをする時間等を振り返り、各校が配付している家庭学習の手引きやシラバス（授業計画）をもとに、家庭学習の定着に向けた取組を進めていきます。また、「読書旅行」や「家庭読書の日」の取り組みを推進し、小学校低学年から本に触れ合う機会を増やし、語彙量（ごいりょう）を増やしていきます。

『豊かな心』を土台とした社会でいきていく力の育成

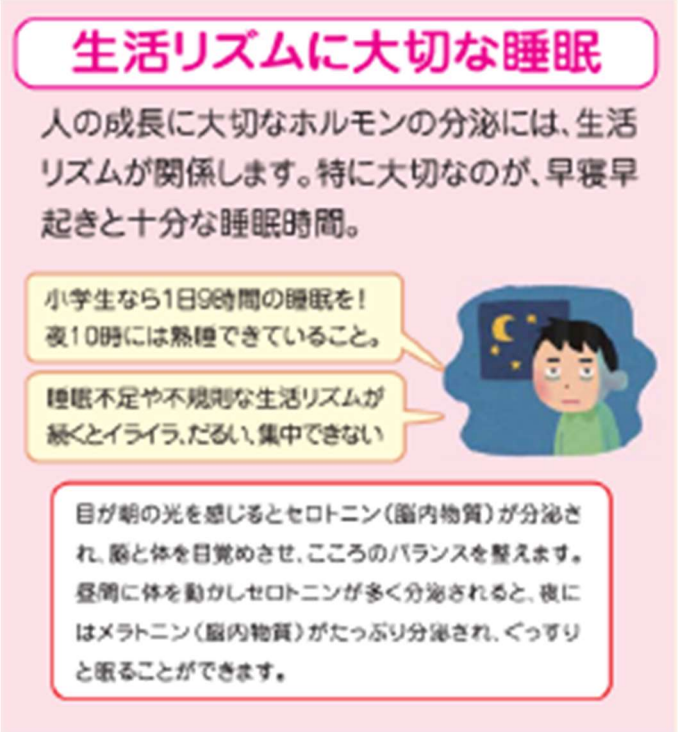
2022 年 4 月に改定しました川越町教育基本方針で示した通り、
川越町は【 『豊かな心』を土台とした社会で生きていく力の育成 】
を基本方針としています。
『豊かな心』を培うために必要なこと（３つ）、
「非認知能力を高めること」
「個性を大切にすること」
「相手の個性を尊重すること」　を大切にし、教育活動を行います。

4. 家庭・地域へのお願い

（１）基本的生活習慣を定着させる

夜の就寝時刻が乱れてくる原因の一つにテレビやスマートフォンの視聴時間が考えられます。家庭内のルールを子どもたちと一緒に会話をしながら作っていただきたいと思います。また、作っていただいたルールが守られているかどうかを見届けていただきたいと思います。夜の就寝時刻が乱れてしまうと朝の起床時刻にも影響し、すっきりとした目覚めができなくなってしまいます。また、そのため朝食をしっかり食べずに登校してしまうことになります。朝食は午前中を元気に過ごすための大切なエネルギーのもとになります。

「早寝・早起き・朝ごはん」を心がけ、規則正しい生活が送れるようにしていきましょう。



（引用元：三重県健康福祉部子ども・家庭局少子化対策課発行「みえ家庭教育応援リーフレット」より）

（２）家庭学習の習慣を定着させる・・・見守る、声をかける

子どものノートや学習したプリント等にできるだけ目を通し、「見守り・声かけ」をしていただくようお願いします。家庭学習を継続させるためには、声をかける、頑張りの過程をほめる、励ますことです。子どものやる気を引き出すことも保護者の役割です。

【家庭学習を習慣化するポイント】
《児童・生徒》
・毎日、決まった時間に決まった場所で勉強する。
・テレビ・スマートフォン等の電源を切って、集中して勉強する。
・机の上をかたづけてから勉強する。
《保護者》
・テレビやゲームを楽しむ時間や、スマートフォンを使用する時間、方法などについて、各家庭でルールをつくる。
例）毎週水曜日は「ノーテレビ・ノーゲームデー」にする。
夜の１０時以降は、携帯電話やスマートフォンを使わない。　など
・カレンダーに「○」を付けるなど、学習の記録を記すようにし、子どもたちの頑張りを「見える化」し、ほめる。

（３）ほめる・認める・・・自己肯定感・自己有用感を高める

今回の児童生徒質問紙の結果から、「およそ２割程度の児童生徒が、自分にはよい所があると感じられない」という状況がみられました。子ども達は個々によって得意なことや苦手なことは様々です。「家族で決めた約束が守れた」「苦手なことにも挑戦した」など、子どもが何かを継続して行ったときや、前向きに挑戦した、以前よりも進歩や成長が見えたときには、その

【子どものほめ方のポイント】
- 他の子（友だちやきょうだい）と比べてほめない
- よかったことを具体的にほめる
- 結果（順位や点数等）に注目せず、努力したことをほめる
- その場ですぐほめる

ＳＨＯＷ１：コミュニケーション能力を高めましょう

コミュニケーション能力は、自主性・表現力・理解力・共感力・協調性などにつながります。そこで、ご家庭でも豊かな会話によるコミュニケーションを心がけましょう。

ＳＨＯＷ２：待ちましょう

子ども自身で考える力を育てるためにも、できる限り自分で考えて行動できるように待ってあげてください。子どもの意欲、自主性、自立性などにつながります。

ＳＨＯＷ３：疑問をもつように誘いましょう

普段の生活の中で「どうして○○は□□なのかな？」「なぜ、△△なのかわかる？」と問いかけることも興味・関心を育てることにつながります。また、子どもの疑問には、ていねいに根気強くつきあいましょう。

ＳＨＯＷ４：思いやりにつながるように、家庭内のルールづくりをしましょう。

家庭内のルールづくりは、子どもの自制心・誠実さ・忍耐強さにつながることはもちろんですが、思いやりや共感力を育みます。

ＳＨＯＷ５：感情に任せた暴言は、やめましょう。

状況により、どうしても叱らなければならない場合もありますが、とっさに言い返したりするようなことは絶対にやめてください。その時は「６秒以上の間深呼吸」などのアンガーマネジメント、すなわち怒りをコントロールし、子どもが「なぜ、叱られたのか」を納得できるような叱り方をしましょう。

機会を見逃さず、きちんとほめましょう。成功や失敗、順位や点数等だけに注目するのではなく、過程を大切にして、子どもの意思で行動したことを評価することが大切です。

（４） 家庭で読書をする時間を増やす・・・親子で読み聞かせや読書をする機会を大切にする

読書活動は、使う言葉の幅が広がり表現力が向上し、より豊かな会話につながります。いろいろな考え方に接したり、想像力を膨らませたりすることにより、共感力や発想力が生まれます。「語彙（ごい）の量と質」の違いが学力差に大きく影響しているとの指摘があります。まずは、おうちの方からの読み聞かせや、テレビの時間を読書の時間に変えることから始めましょう。また、おうちの方が読まれた本やお気に入りの本を子どもに紹介し、本に対する興味を持たせるようにしていきましょう。

（５） 子どもたちの『豊かな心』の育成に向けて、五つの「ＳＨＯＷ」で子どもと関わりましょう。

五つの「ＳＨＯＷ」は子どもに接する時の心得ですが、同時により良い生き方のモデルを子どもに見せることにもなります。五つの「ＳＨＯＷ」を心掛けたかかわりを通して、保護者も子どもも「非認知能力」を高めながら『豊かな心』を培いましょう。